中日新聞　（第3種郵便物認可）

就活ツアー

複数社で学生呼び込む

工場や制作部門など 現場PR

旬ワードの現場から

複数の企業が集まってそれぞれの現場へ学生を呼び、仕事の魅力を紹介する「就活ツアー」への期待が中小企業の間で高まっている。人手不足が深刻化する中、1社単独でPRする余力が乏しい企業にとっては、来社してもらえる貴重な機会だ。（寺本康弘）

上スカイの担当者から木材加工の説明を受ける学生たち＝磐田市で　下学生同士や企業の担当者との理解を深める目的で実施したものづくりのワークショップ＝袋井市で

「大阪・関西万博の大屋根リングや日本館でも部材が使われたんです」。建築木材の加工などを手がけるスカイ（磐田市、従業員約180人）の本社で2月26日、担当者が画像を示し、学生に自社の技術力をアピールした。

学生たちは社内を巡り、コンピューターを用いた設計や工場での木材加工を見学。事務室内で感じる木のぬくもり、自動化が進む加工の様子など、外部からは分かりにくい実際の職場を興味深そうに見て回り、活発に質問していた。

この見学会は県西部のものづくり企業を訪問する就活ツアー「テクたび」の一部。新卒採用コンサルティングなどのナナクレマ（静岡市葵区）が企画した。県内製造業の高い技術力を伝え、若者の県外流出を食い止める狙いがある。

今回見学したのは5社。1泊2日の日程で、都合に合わせて1日だけや1社だけの参加も可能だ。初日の26日には6人が参加し、企業訪問の前に、学生同士や企業とのつながりを深めるイベントも催した。

袋井市内のツアー拠点への交通費は参加者が支払うが、それ以外の費用は企業が負担。工場の多くは学生が気軽に訪れにくい郊外に立地しているため、各社が送迎に協力した。

ツアーは昨年8月に初めて開かれ、参加した13人のうち7人がインターンシップ（就業体験）を希望した。

今回の見学企業のうち、木村鋳造所（清水町、従業員約900人）の御前崎製作所第三製造部の杉山優一総務課長は「会社名だけで学生に来てもらうのは難しい」と認めつつ「イベントのオブジェを制作するデザイン部門や、ロボットが作業する工場の様子を見ることもできる。来てもらえれば魅力を伝えられる」と力を込める。

学生が働くイメージを具体化できることも利点だ。今回のツアーに参加した男子大学生(20)は「話を聞くだけの企業説明会は面白くない。働いている姿を見ることで、どんなふうに働くか想像できる」。別の男子大学生(21)は「情報だけならインターネットで分かる。ネットでは分からない現場を見られるのが良い」と歓迎した。

就活ツアーは企業や自治体が各地で運営している。富山県は就活バスツアーを実施。学生が企業を知り、企業も学生と接点を持てる機会になるとして好評という。

繊維産業が盛んな岐阜県羽島市や愛知県一宮市の業界団体も、協力して2024年から就活ツアーを続けている。これまでに6回開催され、就職につながった例も。団体の一つ、岐阜県毛織工業協同組合（羽島市）の山田幸士専務理事は「まずは参加して雰囲気や仕事を理解してほしい。参加する学生同士のつながりも持ってもらえたら」とPRしている。

中日新聞　2026年3月17日（火）　朝刊